潜在的連想テスト (IAT) を用いた曖昧性への態度測定を試み

○井出野尚¹・林 幹也²・竹村和久³

(¹早稲田大学文学研究科・²明星大学・³早稲田大学文学学術院)

キーワード: 曖昧性、潜在的連想テスト、エルスバーク・パラドクス

Measuring implicit attitude toward ambiguity using Implicit Association Test.

Takashi IDENO¹, Mikiya HAYASHI² and Kazuhisa TAKEMURA³

(¹ Graduate School of Waseda Univ., ² Meisei Univ., ³ Waseda Univ.)

Key Words: ambiguity, Implicit Association Test, Ellsberg's Paradox

目 的

一般的に、人々は曖昧性（不確実性）を嫌う傾向にあると考えられてきた。これまでの行動意思決定論研究では、主体の意思決定環境に対する知識の程度によって、不確実性をリスク、曖昧性などに分類し（竹村他, 2004）、リスク回避、曖昧性回避などの意思決定スタイルを報告してきた。例えば、エルスバーク・パラドクス（Ellsberg, 1961）は、選択結果に関する確率が未知な選択肢よりも、確率が既知な選択肢が選好されることを示している。

他方で近年では、日常的文脈における多義的な曖昧性への態度を測定する試みもある。特性的な意思決定スタイルの測定を目的として開発された意思決定尺度（井出野他, 2012）においては、「どんな結果になるか、その確率が曖昧な選択肢を選びたい」といった項目に代表される不確実性選好因子が報告されており、従来の一般的な曖昧性回避とは異なる結果が得られている。

これらに対して本研究は、曖昧性への態度を測定するにあたって、潜在的連想テスト（Single Category IAT: SC-IAT）の使用が可能であるか検討するための実験を実施した。

方 法

下記の3種のSC-IATと、エルスバーク課題などで構成された質問紙冊子による測定を実施した。SC-IATはコンピュータ上で実施され、用いられた各カテゴリはいずれも4個の刺激語を有していた。

実験参加者: 大学生18名。

曖昧性態度 SC-IAT: 「確実」「あいまい」「良い」の3カテゴリを用いた。「あいまい」と「良い」を同一キーで分類するブロックを一致ブロック、「確実」と「良い」を同一のキーで分類するブロックを不一致ブロックとした。

曖昧性-自己 SC-IAT: 「確実」「あいまい」「自己」の3カテゴリを用いた。「あいまい」と「自己」を同一キーで分類するブロックを一致ブロック、「確実」と「自己」を同一のキーで分類するブロックを不一致ブロックとした。

自尊心 SC-IAT: 「自己」「良い」「悪い」の3カテゴリを用いた。「自己」と「良い」を同一キーで分類するブロックを一致ブロック、「自己」と「悪い」を同一のキーで分類するブロックを不一致ブロックと仮定した。

エルスバーク課題: 「赤玉を引くと1万円を獲得できる」くじに関する質問という問題設定のもと、3種類の課題を行った。各々の課題は、2つの箱のうちいずれの箱からくじを引くかといった2選択肢で構成された。課題1の選択肢1は「赤の玉が50個、白の玉が50個入っている箱」、選択肢2は「何色の玉があるか、それぞれ何個ずつあるか不明だが、全部で100個の玉が入っている箱」という選択肢で構成された。選択肢1は「リスク選択肢」、選択肢2は「曖昧選択肢」に位置づけられた。課題2、3では、選択肢1の内容を一部変更した。課題2は「赤玉30個、白玉70個」、課題3は、「赤玉70個、白

玉30個」であった。実験参加者は、いずれの箱からくじを引くかの回答と、曖昧な箱の赤球数の推定を行った。

結 果 と 考 察

質問紙に欠損値がみとめられた被験者2名を削除し、16名のデータを対象に分析を行った。3つのSC-IATの測定結果をTable 1に示した。

Table 1
SC-IATにおける平均反応潜時(ms)

	一致ブロック	不一致ブロック	IAT量
曖昧性態度SC-IAT	635 (91)	594 (73)	-41(59)
曖昧性-自己SC-IAT	638 (116)	622 (103)	-16(55)
自尊心SC-IAT	551 (57)	579 (76)	28(52)

Note. 括弧内は標準偏差を示す。

曖昧性態度 SC-IAT では、一致ブロックと不一致ブロックの平均値に有意差がみとめられ ($t(15) = 2.73, p < .05$)、「確実」と「良い」の連合が、「あいまい」と「良い」の連合よりも強いことが示された。自尊心 SC-IAT においても有意なブロック差が認められた ($t(15) = 2.13, p < .05$)。一方、曖昧性-自己 SC-IAT では有意なブロック差は認められなかった ($t(15) = 1.18, n.s.$)。また、曖昧性態度 SC-IAT と他の SC-IAT 間には有意な相関は認められなかった。

エルスバーク課題における曖昧選択肢の選択結果は、課題1では19%、課題2では81%、課題3で6%であった。課題1、3においては、曖昧性回避の選択傾向がみられたが、課題2では曖昧性選好の傾向が認められた。

曖昧性態度 SC-IAT とエルスバーク課題の関連性を検討するために、曖昧性態度 SC-IAT 効果量と3つのエルスバーク課題における曖昧選択肢の球数推定値との間の積率相関係数を求めた。その結果、課題2において有意な相関を示したが ($r(14) = .66, p < .05$)、課題1、3は有意な相関を示さなかった ($r = .20, n.s.$; $r = .03, n.s.$)。両者の間に一貫した関連性は認められなかったが、エルスバーク課題の条件によっては、曖昧性態度 SC-IAT で測定された「あいまい」と「良い」との連想強度と、曖昧な選択肢への推測傾向との関連が示唆された。よって IAT による曖昧性への態度の測定には、一定の予測的妥当性が期待されるとの結論を得た。

今後の課題として、30人程度のデータの追加を行い、曖昧性の態度と選択傾向との関連の検討を行うこととする。

引用文献

- Ellsberg, D. (1961) Risk, ambiguity, and the Savage axioms. *Quarterly Journal of Economics*, **75**, 643-669.
井出野尚, 大久保重隆, 玉利祐樹, 阿部周造, 竹村和久 (2012) 意思決定過程に関する質問紙尺度の開発, 行動経済学会第6回大会・第16回実証社会科学カンファレンス・合同大会.
竹村和久, 吉川肇子, 藤井聡 (2004) 不確実性の分類とリスク評価, 社会技術論文集, **2**, 12-20.